Osaka University Knowledge Archive

Title	時間・テクスト・主体 : ディケンズ後期小説の構造
Author(s)	新野, 緑
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43277
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【13】

氏　　名	新野（にいの）　緑（みどり）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　16658　号
学位授与年月日	平成14年2月19日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**時間・テクスト・主体** **－ディケンズ後期小説の構造－**
論文審査委員	（主査） 教　授　玉井　暲 （副査） 教　授　森岡　裕一　　助教授　服部　典之

論文内容の要旨

本論文は、19世紀イギリスの小説家チャールズ・ディケンズの後期小説に見られる特質を、時間、テクスト、主体という三つの観点から解明しようとした研究である。ディケンズ前期小説の一般的特徴としてピカレスク小説的構造を指摘したあと、この静的で無変化型の成長しない主人公が次第に脇に追いやられ、やがて、動的で時間の変化を取り込んだ新しいタイプの主人公が登場するようになるディケンズ後期小説の独自な世界が構築されてゆく過程を、主要作品の綿密な読解を通して丹念に跡づけている。論文は、序章、本論全10章、結論から構成され、全体で総頁数378頁（注、参考文献を含む）に達し、400字詰め原稿用紙に換算して1100枚を超える大部の論文である。

序章において、ディケンズの全小説を俯瞰するテーマや視点の設定が求められていることを説いたあと、第一章は、前期小説5編を取り上げ、その特徴をなすピカレスク的小説構造が、作家の時間意識との関わりにおいて変貌してゆく過程を探る。第二章では、後期への過渡期小説として『マーティン・チャズルウィット』を位置づけ、従来の固定的な性格論では捉えられない、後期小説に現れる主人公像の原型を指摘する。

第三章において、後期小説の第一として、『ドンビー父子』が時間・ジェンダー・セクシュアリティの観点から考察され、この小説は、時間的な流動体として自己の本質を容認する主人公ドンビーが男性的な自己の崩壊を語る物語であると結論づけられる。第四章では、『デイヴィッド・コパフィールド』について、自伝小説性を強調する従来の見方を排し、家庭というロマンスを作り上げる「物語構築」そのものを語る、創作についての小説だと見て斬新な読みを提示している。第五章は、『荒涼館』にはテクスト解読という行為が物語のさまざまな層で反復される面が見られ、無機的なシステムと化した世界の中で人間的な意味を読み・見出そうとする虚しい試みそのものがこの小説の重要なテーマだと主張している。第六章の『辛い時代』には、一切の言語化を拒む破壊的エネルギーを具現する人物が登場していることに注目し、ここにディケンズの自己と世界に関する新しい認識の現れを見る。第七章では、『リトル・ドリット』という小説は、「見ること」と主体の関わりを描き、人間の基本的な認識の限界を問題にした作品だと解釈している。

第八章は、『二都物語』には現実世界の捉えがたいエネルギーへの意識がエクリチュールの次元において窺えることを指摘し、この「動揺」の諸相を読み解くことによって、ディケンズの作家としてのアイデンティティの不安を見て取っている。第九章では、『大いなる遺産』の主人公ピップが、断片化する自己の意識に脅かされ、周囲に存在する物語の枠組みを借りて自己形成をはかろうとするものの、一層分裂の様相を深めてゆく過程を解明している。この

自己崩壊の意識をさらに追究したのが、第十章の『互いの友』論である。論者は、この意識がごみの山とテムズ川の二つの象徴に託されていることを述べ、結局、自己形成の可能性は他者との関係においてでしかあり得ない人間像が提示されていると主張する。

以上の本論を踏まえて、論者は、ディケンズの後期小説には、魂の奥にひそむ捉えがたい欲望に揺さぶられる人間像が表され、ここに窺える内と外との分裂の意識は、書く主体としてのディケンズにおけるアイデンティティの不安と密接な関係にあると主張する。そして、まさしくこの意識にもとづいて、創作の手段としての言葉と意味の分裂、視覚による認識の歪み、自己や世界のテクスト性といった、きわめて現代的なテーマを創作の中核に抱えた小説家ディケンズが誕生したのだと結論づける。

論文審査の結果の要旨

本論文は、19世紀イギリス小説を代表するディケンズの後期小説8編を取り上げ、時間意識の流動性、テクストとして表象される世界と人間存在、主体の確立と崩壊という斬新なテーマが複合的に展開するありようを追究することにより、ディケンズ後期小説の特質を鮮やかに解明した。19世紀リアリスム小説の典型と見られてきたディケンズ小説において、この伝統的なリアリズム小説の枠組みから逸脱する面に注目し、そこにモダニズム的な小説の詩学の萌芽が潜んでいることを、作品の綿密な読みにもとづき説得的に解明した功績は高く評価されねばならない。さらに、従来のディケンズ小説研究においては、小説作品個々の分析に終始する傾向があって、小説相互の連関を論じた研究があまり見られないという状況を考慮すると、論者が「ピカレスクとの決別」を指摘し、その「変貌」の相を跡づけることによって、結果的にはディケンズの全小説15編を一つのパースペクティヴのもとに捉えることに成功した本論文は、注目に値する独創的な試みといえよう。

ただし、本論文において問題がないわけではない。ディケンズ後期小説の特質として、人間の深層に潜む明確には把握できない暗い破壊的エネルギーや無意識の発見という興味深い指摘を行ってはいるが、これを作品分析を通して説得的に提示するには、さらなる精緻な読みとアプローチの工夫が求められよう。また、テクスト、主体、自己などの重要な概念に関わる言葉・用語の使用において、ときにその輪郭が不鮮明になることがある。また、論に繰り返しが多少見られるのも惜しまれる。

しかし、これらの点は望蜀のごときもので、本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本審査委員会は本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。